

収容所生活、以後、旧満州とソ連の国境の綏河を通り、約十日間ぐらい歩いて入ソする。

「東京ダモイ」の言葉にのせられて一難去ってまた一難である。ソ連シベリヤでの重労働が待ち受けていることも知らなかった。本当の苦勞は人に言っても体験してきた者以外には分からない。残酷悲劇の現実が待ち受けていようとはつゆ知らなかった。

「異国の丘」の歌に勝るとも劣らぬ人生の無常さが、あるいは「暁に祈る」など筆舌に尽くしがたい死に勝る苦しみが待っていたのである。

ただ、最後に言いたいことは、いかなることがあっても過去の過ち、戦争だけは起こさぬように念じつつ、私なりの想い、願いを込めながらペンを置きたいと思いません。

旧満州方面実体験記

大阪府 岸川 満

体験談に入る前に徴兵検査、特に私の召集は昭和十九年四月であるので、当時、日本国内における旧軍人の状況または戦果の報告等に遡って話した方が、軍部の兵役義務等の変化が分りやすいと思って、あえて原点よりお話しします。これより旧軍人の満州における実体験談ということ録音させて頂きます。

今から遡ること五十二年前の徴兵検査から申し述べます。当時私は台湾に居住しておりまして、ちょうど徴兵検査当時、台湾特有の阿米ーバー赤痢にかかり、一時は徴兵検査が延期かと思いましたが、無理をして本籍地である佐賀県で徴兵検査を受け、前述の病気により丙種合格に結果となりました。

何を隠しましょう。兵隊がいやで、心の中でもう兵役には関係がないと、ヤレヤレとした胸中で、また台湾に

帰りました。時に昭和十二年で、すでに支那事変が勃発して、あちこちで出征兵士の見送り、片や英霊の出迎えと一般市民も多忙の日々を送っていました。防空演習、慰問袋作り、また街角では肉親の召集により千人針縫い、防空壕掘り等それは忙しかったものです。

事変も一段と熾烈になり、私も意を決して台湾を後に大阪に移りましたが、内地でも当時、食糧ならびに繊維品、衣料品等統制時代に突入し、企業あるいは組合等も合併、吸収される状態の中で、私も絹人絹絲統制会社に入社し、織物部を担当しました。ちょうどこのころ次兄が久留米の部隊に召集を受けました。

昭和十六年十二月八日、帝國陸海軍は今未明、南西太平洋に於いて赫々たる戦果を上げたとの大本営発表のニュースの号外を淀屋橋駅を上ったところで手にし、いよいよ来る時が近づいてきたような胸騒ぎを感じました。そうこうしている間に弟が東京で学徒出陣で呉海兵団に入団する途中、大阪に立ち寄り、兄弟で分かれの宴を盃に托しました。

軍部も兵員の必要に迫られてか、昭和十二年十二月一

日付で兵役法を改正して丙種合格を第二國民兵役に編入、これで私もいやな兵役の義務を負う羽目になる。片や当時職業によっては、軍の命令で軍属または徴用で引っ張られ、それぞれ軍関係の管理工場に勤務の拝命を受ける状態でした。

私は統制会社勤務ゆえに軍属及び徴用の拝命はありませんでしたが、ある日会社の決算のため日曜出勤で仕事の中に、当時世話になっていた朝日新聞社勤務の叔父の家から「仕事が一段落したら、すぐ帰って来い」との電話で、あっ、召集だなアとピンとききました。

仕事を手早くまとめ、豊中に帰宅いたしました。当時ほとんど召集令状は例の赤紙といっておりましたが、私の場合は本籍地が佐賀で遠路のために赤紙ではなく、電報だったので赤紙は知りません。

その電文はまさしく召集であることは分かりましたが、場所は書いてなく、部隊名は数字です。入隊の月日は分かりましたが、その他のことについて近所の知人等に聞き合わせましたが要領を得ませんので、昔の馬場町にあった大阪憲兵隊（現在大阪府警）で尋ねたところ、数

字だけの部隊は久留米の部隊であることが分かり、召集の種別は臨時召集でした。

ちょうど昭和十九年四月十六日で、桜の花も満開、私の青春も時代のせいで恋愛や結婚もできずに、正に貧乏くじに当たったようなものです。会社の人、町内会等の方々に見送られ、二度とみられない豊中大阪をあとに、目的地たる九州久留米にと車上の人となった。列車内は座席がなく、通路に新聞紙を敷いて、その上に寝転んで一夜を明かし、旧久留米歩兵第四十八部隊に無事入隊する。

同部隊には佐賀県から相当入隊していると聞いておりましたが、その連中はとうに海外へ派遣されていたとのこと、我々が最後の召集だなアと感じました。昔は同隊より肉弾三勇士、また戦車兵等優秀な兵隊が出ているので、私も血のたぎる思いがしました。また一方、二度と帰らぬ心地で決意も新たになりました。

即日帰郷にでもなったらすぐ大阪には帰れないなアなど、いろいろなことが走馬燈のように頭の中をよぎりました。入隊はしたものの内務班はいっぱいで、衛兵所の

そばの馬屋のようなところに藁を敷き詰め起居し、約半月過ごしました。

当時、満州の出先部隊に軍旗がなく、四月二十九日陸軍省より軍旗が下賜されるということで真新しい軍旗を迎え、軍旗祭を行い、終了後、「お前たちは満州要員だ」と上官から指示があり、軍旗祭の日の晩、満州に向けて博多港から出発いたしました。当時の作戦としては仏印作戦不利とみて補充するのかなアと思っておりましたが、満州ということでは一応安堵しました。

船内では、船に初めて乗ったという者が大半で、博多港を出て玄界灘を通過するころから嘔吐者がアチコチ出て往生しました。輸送船が進むにつれ、ふと甲板に出て空を見上げると哨戒機が護衛し、また遙か海上には海軍の駆逐艦が警護進行中で、これだけ護衛していても運が悪いときは機雷に触れてボカ沈を受けることもあるが、幸いにも我が輸送船は釜山港に無事到着しました。

これから朝鮮経由で陸路輸送となるが、久留米ではただ満州ということだけで、目的地は兵隊は分かっています、一抹の不安がありました。途中でリンゴ、甘味品、

弁当等の差し入れを受け、汽車はひたすら満州に向け走り続けました。

窓から見た風景の感じは、話しには聞いておりませんがハゲ山が多く、家屋も内地と違って雪の多いところで、それに対応した建物が多かった。鴨緑江を渡って三時間ぐらい経ったかと思うころ、汽車が停止し、下車命令があり、駅の立て札をみたところ城子溝であることがわかった。一つ先の駅は東溝では一番大きい町らしく、またソ連に一番近い、いわゆる国境の町であることを聞かされた。

城子溝もちょっと丘のようなところになれば、歌の文句に出てくる「後ろハゲ山前ソ連」を思い出しました。駅より約二〇分ぐらいかかってようやく目的地の兵舎についた。その兵舎が第三百六部隊でありました。久留米の兵舎と違い、酷寒零下三、四〇度に耐え得るような構造であるが目についた。転属と同時に真っ先に身上書等、諸手続きをすませ、私は応召まで統制会社の書記という肩書だったので、早速、内務係准尉がちょっと事務所まで来いとのこと、「岸川、お前は事務所で事務を

とれ」との指示を受け、翌日から事務所勤務になりました。

そのころは満州の内務班の方は物凄く気合いが入っており、毎晩ビントを張られておりました。私は事務所勤務でお陰様で逃れました。

約三か月、第一期の検閲が終わるか終わらないかのころ、私も吉林九站の機動第二連隊に転属ということになった。

当初、機動部隊と聞いていたので車両関係かと内心喜んでおりましたが、歩く機動隊といわれてがっかりしました。時に昭和十九年七月末のころと記憶しております。そうこうしている間に命令が下り「在満の将兵半数を動員してソ連国境第二線地区に塹壕を構築せよ」とのこと、幾月も経たずに吉林をあとにしました。この吉林の機動第二連隊はゲリラ戦法を教育する下士官以上の集合部隊で、終了した者は内地経由であちこちの戦地に振り向けられていたらしい。

これを見ても日本の軍部はすでに防衛作戦の準備をしていたような気がします。

我が関東軍の演習でも攻撃作戦でなく、防御演習をやっていたことからでも推察されます。

塹壕構築の場所は、初年兵当時の城子溝よりちょっと南に下がった、もと福岡の連隊のいた老黒山より国境に近いところで、当時の作戦としては第二線地区に陣地構築完了後、一度吉林に復帰して再度完全武装のうえ、この陣地に立てこもる方針であった。もちろん全部が構築作業にかかれないので、構築班と連絡輸送班を編成し、私は連絡輸送班で、作業は陣地構築本部と鉄道沿線の満鉄の駅または満鉄の社宅を基点として、連絡事項及び食糧輸送にたずさわることになりました。

しばらく同じことを繰り返しているある日のこと、満鉄職員全員で金庫より重要書類を取り出し焼却しているではありませんか。びっくりして社員、駅長に聞いてもさっぱり要領を得ません。種々ブッシュした結果、重要書類を焼却後は汽車を南下させ、後の車両は停止せよとの軍の命令だったそうです。当時、満鉄は軍の指揮下にあり、民間人を早目に南下させたと感じました。これが八月の初めごろでした。

この時から何か異変が生じたのではと直感しましたが、軍隊に籍がある以上どうすることもできませんでした。山の中で情報も何もなく、満州の中央部であれば多少とも情報も掴むことができたでしょう。

そうこうしている折りも折、八月五日か六日ごろ、単発一人乗りの攻撃機が低空で機関銃を打ち込んできたので、よく見ると操縦席には女性が乗っている。女性パイロットで、危険よりもその方にあっ気にとられて戦友と話し合ったことだった。

すでに満鉄社員はみな引き揚げたので汽車も不通となり、本隊に糧秣も輸送できないし、連絡事項もないので、本隊に合流すべく後整理していると、薄暮に怪しい人影が線路伝いに二、三人こちらに近づいてくる。ソ連兵の斥候兵だと戦友にも告げ、銃を構え殺気立ったが、向うも兵がいるのに気付いたらしく、急に線路と対角線の山手の方に逃亡した。上官に早速報告したが、深追いはするなどのことで、その場はことなきを得た。

満鉄は引き揚げる、単発飛行機からの機銃掃射、その後の線路つたいの斥候兵の進入などから満州もたごごと

ではなくなったと思った。満鉄の基点を引き揚げ本隊に合流すべく山手に入ったところで、一本しかない国道をM四戦車があたりを威嚇射撃しながら進入してくるのを目の当たりに見て、上官も報告の資料になるとのことで小休止の形で見つめていると、先頭が戦車で山砲、野砲、追撃砲、重機関銃、軽機関銃、歩兵、軽重兵、衛生兵の順で三周りぐらいいして国道がや々と静かになった。

そのことを中隊長に報告した。まもなく中隊長の命令があり、満州第三軍参謀よりなんら連絡がないが、命令があるまで各々その場所を死守せよとのことだった。自動車車両攻撃ゲリラ戦法を執行するのだと、中隊で見習士官一人、下士官二人、兵一五人ぐらいいを二組編成し、両方から挟み撃ちのゲリラ戦を展開するため国道を挟んで相對峙し、待つこと久し、一台の自動車車両が通った。一斉射撃した結果、車両は擱座し、運転手一人は横に倒れ、今一人を探すため見習士官が灌木をかき分けて下りた。道路の測溝に敵兵が隠れているのが分からず見習士官が約一〇分ぐらいいの所まで近づくと、拳銃で狙い打ちされ、頬から小脳に抜ける負傷を負い倒れた。分隊長

は負傷者が出たので、これ以上の搜索は止めた。重傷を負った見習士官には衛生兵による応急処置をとる。すでに五時ごろで、山間の五時は八月であっても、はや暗くなり、担架もないので安全な場所を選び、衛生兵と私が残り、他の兵員は本隊に帰った。

衛生兵によると、絶対安静ということで、場所は狼溪の近所であった。名前のおり獣たちにも警戒し、ソ連兵にも油断がありませんので、一夜を明かすのがとても長く感じ、結局は眠れませんでした。

一方、連絡を受けた本隊では、早速担架で迎えにきたが、本隊の救護班幕舎に収容された時には傷口にウジ虫がわいてすでに小脳を侵しているとの軍医の診断結果が出ました。私も二、三日は救護班に詰めていましたが、軍医の診断どおりの結果が見習士官に出始めました。

また中隊より命令が出て、今度は満州国内に進入したソ連軍の一部が山間の谷間にテントをはって警備している、その幕舎を攻撃するため、見習士官を長とする七、八人の少人数のゲリラ編成で、夜襲を計画した。

目の前に幕舎が見えるので、ある程度忍び足で近づこ

うとすると、セバードの軍用犬が物凄く吠え、一匹が吠えるとおちらこちらの幕舎の軍用犬が連れになって吠え出し、手のつけようがなく、残念だったが本隊の指示で引き揚げ、幕舎攻撃は失敗だったこともありませう。

中隊長も参謀本部より何かの命令があるものと信じ、毎日々々イライラしながら待っていると、九月一日か二日と記憶していますが、玉音放送があったということが山奥の部隊にも分かりました。日本は敗戦したので、九月三日に構築現場に武装解除のためソ連兵が立会いに来るとのこと、そのつもりでとの訓示がありました。大隊長の訓示に対し、我々一同玉音の放送も聞かず、確たる裏付けもなく、かつ日本は負けた憂き目にあつたことがないので、初めは半信半疑でデマではないか、また内地本土、海外の戦地は負けても関東軍は最後の一兵まで、命のある限り戦うのだ。一時は天皇も満州に移ってもらふような話しも持ちきりだっただけに、戦友同士なんともいえない空虚な気持が身をよぎりました。そういうさなかに、本部近くに支那人が単独で迷いこんできたものか、あるいはソ連兵のスパイか定かでない

が、ともかく状況が不安定なことから一時抑留したこともありませう。

ソ連兵が本部まで武装解除に來れば、何かが起こった場合に備えるため武器も全部渡す必要はないとの考えで、各人各人が身を守る最少の武器を隠そうと中隊総動員で武器を隠匿した。

最後にストックしてあつた糧秣も底をついていたので、糧秣輸送に使用していた軍馬までも殺して空腹を充たしたこともあり、軍馬には甚だ申し訳ないことをしたなアと、今でも後悔しております。これも一重に戦争がしからしめたものだと思つています。

屈辱の武装解除には、ソ連兵が上がってくるとのことであつたが、関東軍は何をしでかすか分らないと恐れをなしたものは定かでないが、変更となり、平地の金蒼という場所で武装解除をするから山を下りてこいとの伝令がきた。

大隊長も「武装解除後どうなるか分らないが、各人それぞれ覚悟して応答せよ」との最後の訓示があり、大隊は完全武装して白旗を揚げた兵を先頭に山を下り金蒼

に向かつて行進を続けた。

久留米を出発した時の軍靴の音と武装解除地に向かう軍靴の音とは、まるで違う音に聞こえたのが頭に焼き付いています。

ダモイ青春

滋賀県 国松 清

多くの同窓の陸海軍へ進んだ何人かの者より「日夜猛訓練に励みおる」との便りを受け、意を決し、特別幹部候補生に志願した。念願かない、いよいよ皇国防人の一人として、昭和十九年四月一日、兵庫県加古郡加古川町の神野教育隊航空通信隊に入隊。憧れの軍隊生活に入り、日夜軍務に専念、無事一期の検問終り上等兵に進級、一年後には兵長、転属の命により支那に満州に、お互いの健斗を誓いあって別れた。

昭和二十年に入り敵機の本土空襲激しく、同期生五人とともに航空校を出発する。もちろん国家の干城として

雄々しく散る葉本望なれば、遺書、遺髪、遺爪、遺品と身辺を整理をし懐しの父母のもとに送った。人生二十歳いずこの地にて散ろうと、これ男子の本懐である。途中岡山、広島空襲を目の前にし強く胸を打たれた。この仇は必ずとらねばとみなは頬を赤くしたりする。

博多出発、今まさに祖国を発たんとす。生を受け二十年優しく育んでくれた懐かしき麗しの祖国よ、人々よ、いずまでもこのままでと祈る。荒波狂う玄海灘、同行者一同船酔いに参りたり。

未知の大陸の入口釜山港に上陸。第一印象として暗い不衛生な港町。そして朝鮮半島縦貫鉄道の車中は、ただ郷愁の念と寂漠の感が交錯する。そして東洋第一の製鉄所、鞍山に到着、湯崗子の温泉に入浴し、到着の報告をしたところ、航空通信部隊の主力はすでに北滿へ転出、留守部隊として若干残留しているだけで、受け入れは出来ないことのこと。また車中の人となりチチハルへ向かう。

チチハルの飛行場の一角に駐屯している第十七航空情報隊、満州一六六九六部隊第三中隊（山本隊）に到着し